令和２年白老町議会人口減少に対応する政策研究会会議録

令和２年　６月２９日（月曜日）

開　　会　　午前１０時００分

閉　　会　　午前１１時５９分

○会議に付した事件

協議事項

１．第５次議会改革推進計画（抜粋）について

２．研究会の課題・調査（テーマ）の提案

３．研究計画の検討

４．その他

○出席委員（８名）

座　長	大渕紀夫君	副座長	佐藤雄大君
委　員	西田祐子君	委　員	氏家裕治君
委　員	久保一美君	委　員	長谷川かおり君
委　員	貳又聖規君	委　員	森　哲也君

○欠席委員（なし）

○職務のため出席した事務局職員

事務局長	高橋裕明君
主　査	小野寺修男君
主　任	村上さやか君

人口減少に対応する政策研究会（第１回）

【調査事項】
事務調査：人口減少に対応する政策研究計画について

１．第５次議会改革推進計画（抜粋）について（事務局から）　資料１

●髙橋事務局長から説明
●大渕座長から
・政策研究会の根拠法令等確認
①　自治基本条例第 21 条第３項（議員等の能力向上のために政策研究会を設置）
②　会議条例第 10 条（議決により政策研究会を設置）

・進め方　　自由討議を行い、政策課題を自由に発言できる場にする。

２．研究会の課題・調査（テーマ）の提案（各委員から）　資料２

【各委員からの提案①】

○氏家委員　研究結果をどのように政策立案へ反映させていくか、任期中にどこまでできるのか学ぶ場である。これからの時代は二極化である。地方分権改革後は国と距離を縮める自治体と、そうでない自治体に分かれているのでは。
○久保委員　気候や景観、スポーツ振興など、白老町にしかないものをよく磨くことが重要。
○長谷川委員　高齢者が活躍できるまちづくりの視点が重要。
○森委員　住宅施策の背景について分析すると転出が多いことが分かる。転出を食い止める視点が公営住宅の在り方につながるのでは。コンパクトシティの在り方はどうなのか。東西に広がる地理を生かすべきなのか。
○貳又委員　自給自足のまちづくり（※地産地消という意味）が重要。海外資本が入ってくることを念頭に、わがまちの財産を守ることを考えていく。
○西田委員　白老町の昭和の終わり頃の人口は約２万 4,500 人であった。ほかのまちに比べると過疎化が始まっていなかったと感じている。温泉付き住宅で移住者が増えて、人口減少の開始は遅かったと思われる。しかし、人口減少が始まってからは進行が速かった。国が予測するよりも 10 年早く始まると考えていく必要がある。そのため、急激な人口減少についての勉強が必要。
○佐藤副座長　大きなお金をかけるよりも大切なことは、まちに戻る若者を応援することである。頑張る人を応援する制度が必要。

【各委員からの提案②】

○大渕座長　年齢構成が分散していてよいと思う。さらに意見交換をしてテーマを絞っていく。
○氏家委員　人口減少を食い止めるためには雇用の場が必要。
○貳又委員　環境のまちを確立し、強化するべき。それは町の環境を守る人や企業が入ってきて活動をするということである。「白老町はこのようなまちです」と掲げて、社会貢献意識の高い企業（ＣＳＲ：企業の社会的責任）に来てもらいたい。
○西田委員　小さな自治体で豊かなところは１次産業が盛んである。感染症による経済的打撃などがあれば、足腰の弱さが露見し、風前の灯となってしまう。若い人が入ったり戻ったりして、産業の継承につながると、税収の基盤がしっかりしてくる。白老らしい施策を打ち出す必要がある。飛生芸術祭は関係人口を創出する取り組みのひとつである。その中で、「白老っていいな」と思ってもらえることが大切。
○佐藤副座長　飛生に関わる人の話を聞いていると、「町から話を聞きに来てほしい」という声がある。町が無関心であると思われている。活動に関しては人的支援を求めていると思う。人口は自治体同士の「人のシェア」である。奪い合いではなくなってきている。
○氏家委員　１次産業は男手を主として、女性の力が加わって６次産業が生まれるが、観光より先へはなかなか進めない。芸術や文化には遠くからでも好きな人は来てくれるものである。関係人口を含めてまちの在り方を探っていくべき。
○西田委員　まちというものは、住民から見えるものと、町外の人から見えるものは違うものである。町外の人が町内で過ごしている姿を見たときに、まちがいつもと違って見えることがある。

３．研究計画の検討　資料３
（１）研究会の開催予定について（定期開催）

○大渕座長　会議は２時間が集中の限度という。会議時間はどの程度に設定するのが適当か。資料は委員で共有する。できる限り委員自らが用意する（新聞・雑誌・インターネットから）。委員が用意できないものは担当課で持っている資料の提供を依頼する。午前中に開催して正午で終了するようにするのがよいか。最低でも月２回は開催した方がよい。そうしなければ、前回の振り返りが必要になる。
○西田委員　月２回はしないと検討が進まないと思う。年間スケジュールを決めた方がよい。
○大渕座長　曜日で決めるなど、正副座長と事務局で調整する。

（２）研究テーマ（３から４項目）について
○大渕座長　全部の範囲には取り組めない。研究の重点を決めていく。
○長谷川委員　若者定住の視点が重要。
○久保委員　若者が仕事を通じて定住し、家族を持って暮らしていくことが大事。
○氏家委員　若い人が魅力を感じて暮らすまちへ。財源やインフラなど様々なことが絡んでくる。持続可能なまちづくりの視点が必要。
○大渕座長　佐藤副座長がいう「お金をかけなくてもできること」と氏家委員がいう「お金をかけないとできないこと」がある。給食費を無償化することで本当に人がくるのか、などについても考える必要がある。政策提言をすることは必要で、町や議会を説得するだけの議論が絶対に欠かせない。最終的には具体的な形に持っていく。

◎研究テーマは若者定住対策を主とする。

（３）調査方法について
○大渕座長　どのような資料を用いて、どのような議論をしていくのかを決める。
○西田委員　町に提供をお願いしたい資料は、関係人口・交流人口についてである。町の人口の基礎資料（昭和 20 年頃からの推移が分かるもの）
○大渕座長　町の手間にならないで提供してもらうようにする。
○髙橋局長　国勢調査ベースの統計資料は提供してもらえると思うが、転出理由や政策との関係性の資料はないと思う。
○西田委員　まちの出来事とつなげての資料はもらえないのか。
○大渕座長　町に資料を作成してもらうのは大変なことであるし、あまりしない。
○髙橋局長　提供できるものは提供してもらうとよい。
○西田委員　インターネットから集められる資料についてまず共有したい。
○大渕座長　必要な資料については事務局でコピーをしてもらうことにしたい。町内企業の若い人に実態調査をヒアリングする。

◎白老町に住んでもらうために必要なものを聞きたい。

○氏家委員　若く結婚をして子供を持って、月５から６万円の家賃は負担であるだろう。暮らしやすい環境については、公営住宅の議論も必要。若い時に札幌で家賃の安い所を探して暮らしていた。当時は車にお金を使っていた。今の若い人が大事にしているものは何か。今と昔では違うのではないか。
○佐藤副座長　家庭を持っている人とそうでない人との差、実家暮らしとそうでない人の差があるように思われる。また、若者のニーズは多様化している。つぼ八のような居酒屋やマクドナルドのようなファーストフードが無いと暮らせないという若い人は一定数いる。
○大渕座長　白老に転入して働き始めた人は、ファーストフードがない、カラオケボックスがないとなるのかもしれない。そのようなニーズの差は年齢層別にあると思われるためヒアリングするべき。
○森委員　現場に足を運んでヒアリングしたほうがよい。
○貳又委員　第２期地方創生交付金は関係人口を要にしていくという。ヒアリングの結果が次の交付金申請につながっていくとよい。
○長谷川委員　若い人が白老に戻ってきたら、車がないと暮らせない。マイナスの話をしても始まらないが。
○久保委員　白老に何があればいいのか。白老に何があるから暮らしているのか。白老のよい部分を磨いていく必要がある。
○佐藤副座長　居酒屋やファーストフードを望むのは、人が気軽に集まれる場所を求めているからで

ある。チェーン店ではない所に集まるのはハードルが高い。だからつぼ八やマクドナルドとなる。
○大渕座長　議会でこのような話をするのはあまり例がなく大変貴重である。まずは実態把握が必要。特に若い人のニーズを正確に把握する必要がある。

◎若い人の定住、転入、関係人口、交流人口を増やすための方策について議論していく。

○氏家委員　白老の 20 年後 30 年後の在り方を想像して検討し､交付金申請など国へ投げかけていく、国を動かしていく姿勢が必要である。将来を見通して今これが必要であるというものを導き出す。今できることとその裏付けが必要である。